
くまとサラリーマン

died killer

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くまとサラリーマン

【Nコード】

N2922I

【作者名】

died killer

【あらすじ】

新社会人の杉田了は一流コンピュータ会社の開発課に入った。

そこで杉田の指導員の「山田さん」出会う。

「山田さん」と杉田の繰り広げるコメディです。

「山田さん」あなたは一体、（前書き）

初めて書きました！！

下手な文章ですけど、頑張って書いて行くのでよろしくお願いします！！

「山田さん」あんたは一体、、

「ネクタイ曲がってない、髪もキチンとした、髭も剃ったし、、、、よしっ！」

「今日で俺も社会人か、、、気合い入れていきますか！」

そういつて、俺はボロアパートを出た。

俺の名前は杉田了、年は22歳、今日社会人になる。

今は不安な気持ちと期待がいりまじっている。いつもと同じ街並みのハズなのに、今日はなんだか初めて見たみたいに何だか、よそよそしい。

「挨拶は爽やかにっつと、、笑いを適度に降り混ぜて明るさを強調っとな」

昨日買った「初対面をものにしろ！」という本に書いてあった言葉だ。

会社に行く途中何度もくちずさんだ。

そうしているうちに会社に着いた。

「ついに、、来たな」

俺の入社した会社は一流コンピュータ会社だ。

部署は開発課。

会社に入り、俺はエレベータに乗った。

エレベーターの扉が閉まろうと巨大な何かがエレベーターに駆け込んできた。

「何この人デカっ!!」

「しかも、妙に近くね！前見えないし」

と、思っているうちに開発課のある15階に着いた。

エレベーターの扉が開いた瞬間、目の前の巨体が素早く出ていき、開発課に入っていく。

俺は、「開発課だけに変人が居るんだな」と思う程度だった。

だけど、まさか、あの巨体が、、あんなの何かだった何て言うことは考えもしてなかった、、

巨体な変人が同じ課に居ると思い、俺は少し不安になった。

「まさか、他の人もあんなの打ったら、、ああ、緊張すんなあ」

ビビりながらも開発課の扉を開ける。

「頼む！あんなのばっかじゃないでくれ！！」
俺は願った。

部屋に入るといろいろな機材があった。
さすが、一流コンピュータ会社の開発だ！

しかし、その時、俺はそんな事よりも、まず、人を見た。

そこには普通の人ばかりで俺は喜んだ。

「おはようございます！新入社員の杉田です。これからよろしく
お願いします！」

と、あいさつをすると課長の鈴木さんが
「よろしくな！この課は開発でいつも忙しいから、あいさつはこれ
くらいで、、、仕事を覚えてもらおうと思う。君の指導員は山田
君だ！あとは、山田君に任せるよ」

と、いうとまた仕事を鈴木課長は始める。

俺はまず「山田さん」を探した。

「山田さん、どこに居ますかー？」

すると、さっきの巨体がいきなりあらわれた。

ゲッ！コイツかよ（泣）

「よろしく願います、山田さん」と
俺はいい、「山田さん」を見た。

次の瞬間、俺は驚きで固まった、

「く、く、く、く、くつ熊!？」

山田さん（前書き）

「（鈴木課長ーっ、鈴木課長ーっ、ちょっと、山田さんって熊なんですか？）」

「んっ？そうだけど、何？」

「何で熊が働いてるんですかっ！？ありえないですよ」

「何で？？いいじゃない別に。とりま、君の指導員は山田君だから仲良くやってね」

「マジかよ、、、もうわけわかんない。」

看板に山田さんは「よろしくな！（＾3＾）／」と書いて見せてきた。

どうやら、言葉は話せないみたいだ。

「よっ、、、よろしくお願いします。」

（熊に敬語使わないとなんて、、、（T・T））

山田「まあ、最初は簡単な仕事から教えるからな、ついてこいやあ

あっ！！」

（テンション高っ！）

山田「とりあえず、わかつてると思うけど、ここは開発課だから新製品だすわけだよ。そこで君にはこれのネーミングをつけてもらう

（^ 3 ^） - 「

（顔文字、うまいな、ゝゝ、）

パンツ、

山田「これが新製品だ！」と見せたのは、ゝゝ、

山田さん

「ハアハア、、、、」

「、、、、、、、、死んだみたいだな、、、、。」

「」

山田さん

「（鈴木課長ーっ、鈴木課長ーっ、ちょっと、山田さんって熊なんですか？）」

「んっ？そうだけど、何？」

「何で熊が働いてるんですかっ！？ありえないですよ」

「何で？？いいじゃない別に。とりま、君の指導員は山田君だから仲良くやってね」

「マジかよ、、、もうわけわかんない。」

看板に山田さんは「よろしくな！（＾3＾）／」と書いて見せてきた。

どうやら、言葉は話せないみたいだ。

「よっ、、、よろしくお願いします。」

（熊に敬語使わないとなんて、、、（T・T））

山田「まあ、最初は簡単な仕事から教えるからな、ついてこいやあ

あっ！！」

（テンション高っ！）

山田「とりあえず、わかつてると思うけど、ここは開発課だから新製品だすわけだよ。そこで君にはこれのネーミングをつけてもらう

（^ 3 ^） - 「

（顔文字、うまいな、ゝゝ、）

パンツ、

山田「これが新製品だ！」と見せたのは、ゝゝ、

発明品（前書き）

よかつたら見てください

発明品

「ネクタイ曲がってない、髪もキチンとした、髭も剃ったし、、、よしっ！」

「今日で俺も社会人か、、、気合い入れていきますか！」

そういつて、俺はボロアパートを出た。

俺の名前は杉田了、年は22歳、今日社会人になる。

今は不安な気持ちと期待がいりまじっている。いつもと同じ街並みのハズなのに、今日はなんだか初めて見たみたいに何だか、よそよそしい。

「挨拶は爽やかにっつと、笑いを適度に降り混ぜて明るさを強調っとな」

昨日買った「初対面をものにしろ！」という本に書いてあった言葉だ。

会社に行く途中何度もくちずさんだ。

そうしているうちに会社に着いた。

「ついに、、来たな」

俺の入社した会社は一流コンピュータ会社だ。

部署は開発課。

会社に入り、俺はエレベータに乗った。

エレベーターの扉が閉まろうと巨大な何かがエレベーターに駆け込んできた。

「何この人デカっ!!」

「しかも、妙に近くね！前見えないし」

と、思っているうちに開発課のある15階に着いた。

エレベーターの扉が開いた瞬間、目の前の巨体が素早く出ていき、開発課に入っていく。

俺は、「開発課だけに変人が居るんだな」と思う程度だった。

だけど、まさか、あの巨体が、、あんなの何かだった何て言うことは考えもしてなかった、、

巨体な変人が同じ課に居ると思い、俺は少し不安になった。

「まさか、他の人もあんなの打ったら、、ああ、緊張すんなあ」

ビビりながらも開発課の扉を開ける。

「頼む！あんなのばっかじゃないでくれ！！」
俺は願った。

部屋に入るといろいろな機材があった。
さすが、一流コンピュータ会社の開発だ！

しかし、その時、俺はそんな事よりも、まず、人を見た。

そこには普通の人ばかりで俺は喜んだ。

「おはようございます！新入社員の杉田です。これからよろしく
お願いします！」

と、あいさつをすると課長の鈴木さんが
「よろしくな！この課は開発でいつも忙しいから、あいさつはこれ
くらいで、、、仕事を覚えてもらおうと思う。君の指導員は山田
君だ！あとは、山田君に任せるよ」

と、いうとまた仕事を鈴木課長は始める。

俺はまず「山田さん」を探した。

「山田さん、どこに居ますかー？」

すると、さっきの巨体がいきなりあらわれた。

ゲッ！コイツかよ（泣）

「よろしく願います、山田さん」と
俺はいい、「山田さん」を見た。

次の瞬間、俺は驚きで固まった、

「く、く、く、くつ熊!？」

発明品（後書き）

「なんじゃこりゃ!？」

大きさは携帯くらい。

色は大胆な赤を基調とした赤と青のマーブル模様。

形は、、、鮭。

（気持悪っ（；、A））

「あのー山田さん、これってなんなんですか？」

山田「何だ分らないのか？」（、、、；）「情けないな」

（顔文字うざっ）

山田「みりゃわかるだろ。小型パソコンだよ（「ー」）」

「えっ!？マジですか、こんな小さいのに驚きです!」（鮭にする
アンタのセンスにもな。しかもマーブル模様の鮭なんか見たことね
えよ）

「ちょっと、よく見てみていいですか?」

山田「いいけど、壊すなよ（・・・）」

開いて見ると、画面は案外大きい。待受がかわいい熊になってるけど、

彼女？かな。

キーボードは、いくら仕様だ。色が赤だから目が疲れそうだ

山田「キーボードは強く押すと潰れるから気を付けろよ（<・>）
y -
r

（なっなんだと、そこまでリアルにいくらの質感まで再現するとは、、、

熊と言えど、さすがは開発課だな。

こいつは、やってくれるぜ

マウスは鮭の頭だ。

コードの部分は骨。

これも巧く再現されている。

（ちくしょー！！なんてレベルだ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2922i/>

くまとサラリーマン

2010年12月15日14時56分発行